

論文

3 人称に対する要求・願望表現について

— 接続法 I 式の用法を中心に —

鈴木 康 志

要 旨

ドイツ語では2人称に対する命令・要求は命令法 (Imperativ) が、1人称や3人称には基本的に接続法 (Konjunktiv) が用いられる。接続法は、不定詞の語幹から派生する I 式と過去形から派生する II 式という二つの形態があり、用法は大きく二つのタイプがある。一つは要求や願望を表す要求話法、もう一つは可能性やただ考えられただけのことを表す非現実話法である。前者は I 式、後者は II 式を用いる。

本稿では要求話法を扱うが、接続法 I 式と直説法の人称変化において明確に異なる形態をもつのは3人称単数である。そのため形態が重なる場合は、倒置や話法の助動詞による書き換えなどで要求話法であることが表される。ただ、1人称単数 (自分) に対する要求表現は稀であるし、1人称複数形、つまり勧誘表現 (Adhortativ) に関しては前号で詳しく扱ったので、本稿では接続法 I 式による3人称に対する要求・願望表現を考察する。要求話法は、1. 「～でありますように」という要求・願望、2. 「～であるとしよう」という取り決め、3. 「たとえ～だとしても」といった認容の用法などがあるが、1を中心に扱う。その際3人称複数では1人称と同様に直説法と形態が重なるため、あまり用いられない。3人称単数が、最も頻繁かつ効果的に用いられるが、命令文のように目の前にいる特定の人になされる要求ではなく、第3者に「～されんことを」望む、ないし願うという間接的な要求・願望で、命令形のような直接的な力強さはない。3人称主語が、神、皇帝、悪魔などの場合は、願望、祈願、呪いなどを表す決まっ

た言い回しになる。また、主語が *man, jeder, einer* などの不定代名詞や *wer ...* のような不定文の場合は、不特定のどれか、ないし一般的、格言的な要求になるが、しばしば命令文と形態的な区別がつかない。

また、3人称に対する要求は、話法の助動詞を使っても表される。*suln* (*sollen*) 以外、古高ドイツ語や中高ドイツでは *müezen* (*müssen*) の接続法 I 式が使われることが多いが、その後 *müssen* の意味の変化とともに *mögen* の接続法 I 式 *möge* が使われるようになる。

キーワード：3人称、要求・願望表現、接続法 I 式、要求話法、話法の助動詞、命令文

はじめに

命令や要求を表す文は、平叙文や疑問文とはいくつか異なる特徴を示す。¹⁾ 例えばその呼称をみても、複数1人称、つまり話し手自身を含んだ聞き手に対する提案や要求は、勧誘法 (*Adhortativ*) と呼ばれる。2人称 (聞き手) に対する命令・要求の形式は命令法 (*Imperativ*) と呼ばれ、3人称に対する要求・願望には接続法 (*Konjunktiv*) が用いられる。このような要求表現の呼称の多様性は、平叙文や疑問文で1人称、2人称、3人称に別々の呼称が与えられることがないのとは対照的である。

その際2人称が命令法、3人称が接続法であるのに対して、1人称に対してドイツ語では独自の形態はなく、1人称単数に接続法 I 式、1人称複数の勧誘表現には接続法 I 式、話法の助動詞 *wollen*、使役動詞 *lassen* を用いる。例えば「行こうか!」という勧誘表現は *Gehen wir! Wir wollen gehen!, Lass uns gehen!* となる。ここでは1人称単数の場合をまず簡単にみてみよう。

1人称単数 *ich* (私) に対する命令・要求表現は極めて稀である。今までに例としてよくあげられたのは以下の二つである。一つはゲーテの『ファウスト』「書斎」の場面でのメフィストフェレスの言葉である。²⁾

(1) **Gesteh ich's nur!** (Goethe: *Faust I.*, S.41, Paul (1958:156))

きっぱりと白状してしまえ。

ここでは定動詞倒置、*nur* の強意により、主語 (自分自身) に対して「言っ飛ばしまえ」という、話者 (メフィストフェレス) の思いがより強く表されている。もう一例は、太宰治が「走れメロス」執筆に際して題材をとったシラーの詩「身代わり (*Die Bürgschaft*)」(1798年) の最後の一節で、これも実に様々な研究者に1人称単数の命令文の例としてあげられてきた。³⁾

- (2) Drauf spricht er:>Es ist euch gelungen, それから王は言った「お前たちは成功したのだ
Ihr habt das Herz mir bezwungen. お前たちは私の心に勝ったのだ
Und die Treue, sie ist doch kein leerer Wahn 信頼とは決して虚ろな妄想ではないのだ
So nehmet auch mich zum Genossen an! されば私も仲間に入れてくれ
Ich sei, gewährt mir die Bitte, 私の願いを聞き入れて、どうか私を
In eurem Bunde der Dritte.< お前たちの仲間の一人に加えてくれ！」

(Schiller: Die Bürgschaft, In: *Gedichte*, S.63)

友のため、自らの命を顧みず満身創痍で戻ってきたダーモン（太宰治の場合はメロス）と身代わりとなった友とが感涙きわまり抱き合っている姿を見て感動した王、それまで人を信頼できずにいた王の言葉である。gewährt mir die Bitte は話し手（王）のお前たち（抱き合っている二人）に対する願望を述べた普通の命令文（私の願いを聞き入れてくれ）である。問題の1人称の命令文は Ich sei in eurem Bunde der Dritte.（どうか私をお前たちの仲間の一人に加えてくれ）である。

このようにドイツ語では、2人称に対する命令は一般に命令法が用いられ、1人称と3人称には接続法Ⅰ式が用いられる。そこで接続法Ⅰ式の形式と用法をまずみてみよう。

I. ドイツ語接続法Ⅰ式の形態と用法

接続法には、不定詞の語幹から派生するⅠ式と過去形から派生するⅡ式という二つの形態があり⁴⁾、用法は大きく二つのタイプがある。一つは「要求話法 (der voluntative Konjunktiv)」で願望や要求を表す。もう一つは「非現実話法 (der potentiale Konjunktiv)」で可能性やただ考えられただけのことを表す (Dal (1966:137))。⁵⁾ 前者には接続法Ⅰ式が、後者にはⅡ式が用いられる。接続法Ⅰ式による要求ないし願望を表す文は Heischesatz と呼ばれるが、その用法にはさらに以下のものがある。⁶⁾

1. 「～でありますように」という要求・願望の用法

Gott helfe mir! 神様が私を助けて下さいますように！

2. 「～であるとしよう」という取り決めの用法

α sei eine Variable. α を変数であるとしよう。

3. 「たとえ～だとしても」といった認容の用法

Was er auch sage, ich glaube ihn nicht. 彼が何を言おうと私は彼を信じない。

本稿では特に最初の要求・願望の用法を中心に扱う。文法書などでは接続法の用法の中で最も簡略に扱われる箇所である。現代のドイツ語では、接続法Ⅰ式は改まった言語使用などに限られ、話し言葉では大きな役割を果たさなくなっている (Bausch (1979:214))。また、今

までは接続法 I 式で表現されていたことが、語法の助動詞や法の副詞などによって代用されるようになり (Flämig (1962:173))、接続法 I 式の要求や願望の用法は –Schwartz (1973:34) の言葉を借りれば– 型にはまった言い回し、昔の言語の遺物 (stereotype Wendungen, Relikte eines früheren Sprachzustandes) になった感がある。⁷⁾ ただ、この用法はドイツ語の歴史的な研究には重要であるし、命令文との比較には欠かせないものである。Jung (1982:233) によれば、接続法は文にニュアンスをつける重要な手段である。それでは、直接的に聞き手に向けられる要求である命令文に対して、聞き手に直接ではなく、3 人称に向けられた要求はどのようなニュアンスの違いがあるのだろうか？ そこでまず接続法 I 式の形態を直説法の形態と比較してみよう。

	接続法 I 式人称変化表 (カッコ内は直説法)		
不定詞	kommen	fahren	sein
ich -e	komme (komme)	fahre (fahre)	sei (bin)
du -est	kommest (kommst)	fahrest (fährst)	seiest (bist)
er -e	komme (kommt)	fahre (fährt)	sei (ist)
wir -en	kommen (kommen)	fahren (fahren)	seien (sind)
ihr -et	kommet (kommt)	fahret (fährt)	seiet (seid)
sie -en	kommen (kommen)	fahren (fahren)	seien (sind)

上記の表から明らかなように、sein 動詞を除けば、接続法 I 式と直説法の人称変化において明確に異なる形態をもつのは 3 人称単数だけである。2 人称に対する命令・要求は一般に命令法によってなされるので、ここでは 2 人称における直説法との差異には触れない。1 人称では単数、複数とも接続法 I 式と直説法の形態が重なるため、すでに例文 (1), (2) でみたように、Gesteh ich' s nur. や Gehen wir! のように 1 人称の場合は倒置することにより要求表現であることが示されることになる。⁸⁾ ただ、1 人称単数に対する要求は稀であるし、1 人称複数の要求文、つまりドイツ語の勧誘表現に関しては前号で詳しく扱ったので (鈴木 (2017a))、本稿では接続法 I 式による 3 人称に対する要求・願望表現について考察してみたい。

II. 3 人称に対する要求・願望表現の歴史的な実例

1. ゴート語の場合 (4 世紀)

ゴート語では、1 人称複数の場合と同様に、3 人称に関しても命令形の形態が保持されていた。すなわち 3 人称に対する命令形は基本的に、単数では語尾 -adau、複数では -andau の

形態をとった。例えば *niman* (*nehmen*) の3人称に対する命令形は *nimadau* (= *er nehme*)、*nimandau* (= *ihr nehmet*) である。(千種 (1989:49, 58)、相良 (1990:238)) ゴート語の実例を4世紀のヴルフィラのゴート語訳聖書でみてみよう。

- (3) *sa Xristus, sa biudans Israelis, atsteigadau nu af þamma galgin...*

イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがいい。(千種 (1989:152))

ゴート語 “*atsteigadau*” は *atsteigan* (降りる) の3人称 (ここではキリスト) に対する命令形である。ただ Dal (1966:139)、千種 (1989:152) によれば、3人称の命令形はあまり現れないとのことである。このような3人称に対する命令形の形態はドイツ語では失われることになる。その点を次に古高ドイツ語や中高ドイツ語の例でみてみよう。

2. 古高ドイツ語 (750 ~ 1050年) の場合

古高ドイツはオトフリースの『福音書』(9世紀)の「ルートヴィヒ・ドイツ王にあてた献呈詩」の最初の箇所でもてみよう。訳は Johann Kelle (1870) の現代ドイツ語訳と新保 (1993:2f.) の訳や注釈に基づいている。

- (4) *Thémo si íamer héili joh sálida giméini*

druhtin hóhe mo thaz gúat joh frewe mo émmizen thaz múa

(*Otfrids Evangelienbuch*, hrsg. von Erdmann, Ludwig. 5~6, S.1)

Ihm werde alle Zeiten Heil und Wohlergehen auch zu Theil!

Der Herr erhöhe stets sein Glück, erfreue seine Seele ihm,

(Aus dem Althochdeutschen übersetzt von Johann Kelle, S.486)

王にいく久しく平安と至福が与えられますように。

主がこの王にいつも幸運をもたらし、王の心を喜びで満たしてくださるように。

si は古高ドイツ語 *sin* (*sein*) の接続法 I 式3人称単数で、現代ドイツ語の *sei* にあたり、要求話法の用法である。⁹⁾ また *hóhe* (*erhöhe*)、*frewe* (*erfreue*) も接続法 I 式3人称単数で、ともに要求話法の用法である。主語は最初の文が *héili* (Heil [平安]) と *sálida* (Wohlergehen [至福])、次の文は *druhtin* (der Herr [主]) であり、すでに3人称に対する要求が接続法 I 式で表現されている。

3. 中高ドイツ語 (1050 ~ 1350年) の場合

中高ドイツ語は、ハルトマン・フォン・アウエの『イーヴェイン』(1170 ~ 75年?) と『哀れなハインリヒ』(1195年?) の例を現代ドイツ語訳とともにみてみよう。

- (5) *got... sende mir hînaht den tôt.* (*Iwein* 4491, S.264)

Gott... **sende** mir heute Nacht den Tod!

神が私に今夜のうちに死を与えてくださいますように！

- (6) got **lône** iu, lieber herre, **Vergelt's** euch Gott, geschätzter Meister,
 daz ir mir alsô verre dass ihr mir so genau
 hât die wârheit gesaget. die Wahrheit gesagt habt.

(*Der arme Heinrich* 1111~13, S.88)

お医者様、私にほんとうのことをおっしゃって下さいましたことに対して、
 神様があなた様に報いてくださいますように。

例文(5)は、got が主語で **sende** は **senden** (与える) の接続法 I 式 3 人称単数の要求話法である。例文(6)は、**lône** は **lônen** (〜に報いる) の接続法 I 式、3 人称単数の要求話法で、感謝を表す決まった言い回しである。このようにゴート語においては 3 人称単数や複数に対する命令形が保持されていたが、ドイツでは古高ドイツ語や中高ドイツ語でもこれが失われたので、接続法をもって代用されるようになった (相良 (1990:238))。

4. 初期新高ドイツ語 (1350 ~ 1650 年) の場合

初期新高ドイツ語はルターの聖書訳でみてみよう。ルターの聖書における接続法に関しては工藤 (1986, 1987) に研究があり、工藤によればルターの聖書 (マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの 4 福音書) に現れる接続法は 713 個、そのうち接続法 I 式は 395 個、そして 3 人称単数が 335 個、そのうち 90 個が要求話法である。その際、要求話法は主文形式の典型的なものだけを数え、*Sehet zu, das es niemand erfare,...* (このことは誰にも知られないようにしなさい) (マタイ 9-30) のような副文内での要求の用法は目的文に分類されている。この工藤の調査結果からもルターの聖書に接続法 I 式による 3 人称への要求・願望表現がいかに多く現れるかがわかる。ルターが新高ドイツ語の作家の中で、接続法による要求話法 (Jussivformen) を最も生き生きと、そして最も豊かに用いた (Wunderlich (1901: 278)) と言われる所以であろう。ここではいくつか例をあげるにとどめる。

- (7) Vnser Vater in dem Himel. Dein Name **werde** geheiligt. Dein Reich **kome**.

Dein Wille **geschehe**. (Luther: *Mattheus* 6, 9-10, S.24)

天にいます我らの父よ、御名が崇められんことを、御国が来、御心が行われんことを。

- (8) Wer vnter euch on sunde ist, der **werffe** den ersten stein auff sie.

(Luther: *Johannes* 8, 7, S. 260)

おまえたちの中で罪がない者は、石をこの女に投げるがいい。

III. 現代ドイツ語における3人称に対する要求・願望表現

現代ドイツ語の接続法に関しては Flämig (1962), Jäger (1971), Magnusson (1976), Bausch (1979), Buscha / Zoch (1984) などの研究から、最近の Petrova (2008), Jäcke (2011) などがある。わが国では関口 (2000 [初版1954]), 常木 (1996 [初版1960]) などの優れた著作や工藤 (1986, 1987), 湯浅 (2008, 2009) などの有益な研究がある。また Erdmann (1886), Wunderlich (1901), Behaghel (1924), Paul (1958), Jørgensen (1966), Brinkmann (1971), Erben (1980), Jung (1982), Duden (1984), Zifonun et al. (1997) など様々な文法書にも広範な接続法の記述があるが、現代の文法書では接続法 I 式の要求話法に関する記述はあまり多くない。本稿ではこれらを参考にしつつ、筆者が収集した例文などで、主文形式の接続法 I 式、要求話法による3人称に対する要求・願望表現について考察する。

1. 接続法 I 式+Er / Sie (単数) による2人称に対する敬称的な要求表現

3人称に対する要求・願望表現が本稿のテーマであるので、本題と少しズレるが、ドイツ語の歴史において接続法 I 式が2人称に対する敬称的な要求表現として用いられたことがあったので、その点をまず簡単に触れておきたい。

ドイツ語では、中高ドイツ語から16世紀の初期新高ドイツ語まで、敬称の命令表現には2人称複数形の形が用いられてきた (例えば、例文(6)の *ir (ihr)*)。これが17世紀に入るとその敬意が減り、その代わりに接続法+3人称単数 (*Er / Sie*) による要求の敬称表現が生じる。さらに18世紀に入ると、3人称代名詞による敬称も俗化し、命令文も3人称複数の *Sie* が用いられるようになる。一方、18世紀後半から19世紀になると3人称代名詞はその価値を下げ、卑小詞として用いられるようになり、その後19世紀後半には消滅する。¹⁰⁾ ここでは18世紀に敬称表現として用いられた例と19世紀すでに卑小詞として用いられるようになった例を簡単にみてみよう。

(9) **Mache Er** sich keine Mühe, Herr Wirt. (Lessing: *Minna von Barnhelm*, S.6)

どうぞお構いなく、ご主人。

(10) Adam. So **hör' Er! Sein** Sohn hat Juwelen gestohlen. Den Dieb haben wir schon.

(Hebbel: *Maria Magdalena*, S.58)

アダム：それじゃ聞け！お前の息子は宝石を盗んだ。泥棒はもう捕まえた。

例文(9)はレッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』(1767年)の中の少佐の従僕ユストから宿の亭主への発言で、接続法 I 式+*Er*は2人称(宿の亭主)に対する敬称的な要求表現である。例文(10)はヘッベルの『マリア・マグダレーナ』(1844年)の中の廷吏アダムの親方アントンに対する発言であるが、もう敬称の意味合いはない。なお、口語ではしばし

ば hören → hör' のように e が落ちることがある。

2. 3人称複数に対する要求・願望表現

1人称の場合と同様に、3人称複数形も sein 動詞を除けば、直説法現在と接続法 I 式の形態は同じである。そのため3人称単数の場合と比べ、複数形は使用例は少ないように思われる。¹¹⁾ Erdmann (1886), Flämig (1962) や関口 (2000) があげている例をみてみよう。

(11) Gatten, die sich vertragen wollen,

Lernen's von uns beiden! (Goethe: *Faust* 1., S.127, 関口 (2000:193))

仲良くしたい夫婦たちは、私たち二人を見習うといい。

(12) **Gehn** einige und **zünden** Reisholz **an**, (Schiller: *Tell*, S.40, Erdmann (1886:123))

誰か2, 3人行って、柴を焚きつけてくれないか。

(13) Ist wahrhaftig eine Ehre für mich, Mamsel ...Compliment, Herr Buddenbrook!..

Na **treten** die Herrschaften **näher**! (Th.Mann: *Buddenbrooks*, S.118, Flämig (1962:113))

おいでいただき光栄です、トニーお嬢様、…ご機嫌いかかですか、ブデンプロークの若旦那、…さあお二人こちらにおいでください。

例文(11), (12)では lernen, gehen と anzünden が倒置され、Gatten (夫婦たち), einige (2~3人) という複数3人称に対する要求話法になっている。例文(13)では treten が die Herrschaften の要求話法になっているが、意味的には Na treten Sie näher! という敬称の2人称複数に対する命令形と相違はないであろう。

3. 3人称単数に対する要求・願望表現

独立文としての要求話法が最も頻繁かつ効果的に用いられるのは直説法と形態が異なる3人称単数の場合である。ここでは3人称単数に対する接続法 I 式による要求・願望表現を、3人称の主語によって場合分けして考察してみよう。

a) 主語の3人称単数が人物の場合

(14) Er (der Prinz) **komme**, und **befehle** es mir noch einmal. (Lessing: *Emilia Galotti*, S.68)

殿下がここに来て、ご自分で私にそれをもう一度命じられるように。

(15) Ein edler Mann **beglücke** meine Gertrud. (Schiller: *Maria Stuart*, S.128)

だれか立派な男が、私のゲルトルートを幸福にしてくださいませように。

(16) Beklagter **trete** vor. (Kleist: *Der zerbrochne Krug*, S.35)

被告人前へ。

この用法は要求・願望など様々である。2人称に対する命令文が一般に目の前にいる特定の人になされるのに対して、接続法の場合は必ずしも眼前の相手とは限らないし、また眼前で

あれ命令文とは少し異なる機能（間接性）を発揮する（Flämig (1962:117f.), Jäger (1972:241), Magnusson (1976:107), Brinkmann (1971:372)、関口 (2000:184)）。例文(14), (15)も目の前にいない人物に「～されんことを」望む、ないし願うという間接的な要求・願望であり、命令文のような直接的な力強さはない。例文(16)は目の前の相手に対してではあるが、法廷での場面ではこのような間接的、客観的な要求表現のほうが適していると言えよう。

b) 主語が *man*¹²⁾, *jeder, einer* などの不定代名詞や *wer...* のような不定文の場合

(17) *Man tue, was man will.* (Goethe: *Egmont*, S.66)

したいことをすればいい。

(18) *Man bind' ihn an die Linde dort!* (Schiller: *Wilhelm Tell*, S.75)

だれかこの子をあの菩提樹に縛り付けろ。

(19) *Man nehme täglich dreimal eine Tablette.* (Duden (1984: 157))

毎日3度錠剤を一つ呑むように！

(20) *Es strebe von euch jeder um die Wette.* (Lessing: *Nathan der Weise*, S.82)

各々が競って励みなさい。

(21) *Trage jeder das Seinige!* (Hebbel: *Maria Magdalena*, S.78)

誰も自分のことは自分でしろ。

(22) *Steig einer auf die Warte und seh, wie' s geht.* (Goethe: *Götz*, S.67)

だれか望楼にのぼって、様子を見てみろ。

wer などの不定文の場合

(23) *Wer zween Röcke hat, der gebe dem der keinen hat.* (Luther: *Lucas*, 3.11, S.158)

2つ上着を持っているものは、もっていないものに一つ与えよ。

(24) *Wer Hirt ist, wintre ruhig seine Herde.* (Schiller: *Wilhelm Tell*, S.57)

牧畜をする者は、ゆっくり家畜に冬籠りをさせよ。

(25) *Nun, so brauch es, wer da will!* (Lessing: *Minna von Barnhelm*, S.98)

欲しいやつはもっていくがいい。

man, jeder, einer などの不定代名詞が主語の場合、不特定の誰か、あるいは一般的、格言的な要求になる。例えば例文(17), (19), (21)は、そこにいる不特定の人物（薬の処方やレシピなども）、ないし各自への要求であり、¹³⁾ 例文(18), (22)は不特定多数への要求である。また例文(23), (24), (25)は不定文 *wer* ～ によって規定された人物への要求である。

このような不定代名詞や不定文と結びついた接続法 I 式の要求話法はしばしば不定代名詞を伴った命令文と区別がつかなくなる。例えば例文(22), (23)は *sehe, gebe* などから命令文ではなく、接続法 I 式の要求話法であることがわかるが、例文(21)などどちらの解釈も可能である。不定文の場合も *Rette sich, wer kann!* (さっさとにげろ!) は形態上はどちらの解釈

も可能である。¹⁴⁾ それでは不定代名詞、不定文の場合、命令文と接続法 I 式の文はどこが異なるのであろうか。まず命令文には **man** を主語とするものはない。その意味でも一般に向けた要求は接続法が適していると言える。また例文(23)のように格言的なものや例文(19)の薬の説明書の場合など明らかなように、命令文はかならずそこにいる誰かに向けられる要求であるのに対して、接続法 I 式の場合は、その場にいる人に向けられる場合もその場にはいない人に向けられる場合の両方がある点である。

c) **Gott** (神)、**Herr** (主)、**der Kaiser** (皇帝)、**der Teufel** (悪魔) などの場合

3人称に対する要求であることにはかわりはないが、3人称主語が一般の人や物、あるいは **man** などの不定代名詞ではなく、**Gott** (神)、**Herr** (主)、**der Kaiser** (皇帝)、**der Teufel** (悪魔) や **der Henker** (死刑執行人) などの場合は願望、誓い、安堵、祈願、呪いなどを表す決まった言い回しになる。例えばトーマス・マンの『ブデンプロック家の人々』には **Gott** を用いた接続法 I 式による表現が多彩に用いられている。

(26) **Gott erbam'**. (S.24) 神様、憐れみたまえ。

(27) **Gott bewahre** uns. (S.39) 神様が私たちを守ってくださいますように。

(28) **Gott segne** dich. (S.57) 神様があなたを祝福してくださいますように。

(29) **Gott verzeihe** mir. (S.100) 神様が私を許してくださいますように。

(30) **Gott sei** mit dir. (S.163) 神様があなたとともにみえますように。

(31) **Gott verdamme** mich. (S.273) 神様が私を罰しますように。

(32) **Gott strafe** mich. (S.300) 神さまが私を罰しますように。

(33) **Gott gebe** es! (S.566) 神様が存在しますように。

(34) **Gott sei** gepriesen (S.630) 神様が称賛されまように。

(35) **Gott sei** gelobt. (S.728) 神様が称えられますように。

これら以外にもよく使われるものに **Gott sei Dank**. (神様に感謝あれ → やれやれ)、**Gott stehe** mir bei. (神様のご加護を)、**Gott (der Herr) gebe**, dass (神様 (主) は～してくださいますように) などがある。¹⁵⁾ そこでこれらの中の一つを『ブデンプロック家の人々』のコンテキストの中でみてみよう。例えば **Gott strafe** mich. は4箇所 (S.162, 300, 341, 758) で用いられているが、ここでは162ページの体験話法として使われている例でみてみよう。¹⁶⁾ シュトゥート夫人はトニーの結婚式に、花嫁の着付けを手伝いながら次のように述べる。

(36) Ich habe, **strafe** mich **Gott**, niemals eine schönere Braut gesehen.

神に誓って申しますが、私はこんなきれいな花嫁は見たことがありません。

ここでは **strafe** mich **Gott** が「神に誓って (もし私の言っていることがうそなら神様が私を罰しますように)」といった定式化された誓いの表現になっている。

上記のように一般にこれらの主語 (Gott など) は単数であるが、関口 (2000:193) には、興味深いことにこのような主語が複数になる例があげられている。

- (37) **Stärken** ihn (Egmont) alle Heiligen, dass er sein Bestes tut. (Goethe: *Egmont*, S.53)

すべての聖者が、エグmont様が最善を尽くせるようお力づけてくださいますように。

- (38) O, **strafen** mich die Götter, lache ich (Grillparzer: *Medea* 1646, S.172)

ああ、神様たち私をお罰してください、私は笑わずにはいません。

それではそれ以外の祈願や呪いなど例も簡単にみてみよう。その際にその本来の意味とテキストに適した表現を併記してみる。

- (39) Es **lebe** der Kaiser! ... Es **lebe** die Freiheit! (Goethe: *Götz*, S.75)

皇帝・自由が(長く)生きられますように → 皇帝万歳! 自由万歳!

- (40) Der Teufel **hol** solchen Krieg! (Grimmelshausen: *Simplicissimus*, S.66)

そんな戦争悪魔がさらっていけ。 → そんな戦争はまっぴらだ!

- (41) Der Henker **hols**! (Kleist: *Der zerbrochne Krug*, S.10)

死刑執行人が私をさらっていきますように! → 断じて!

- (42) **Hol'** mich der Teufel. (Hebbel: *Maria Magdalena*, S.48)

悪魔が私をさらってしまえ! → しまった!

- (43) **Ho'ls** der Geier. (Th.Mann: *Buddenbrooks*, S.623)

秃げ鷹に連れ去られてしまえ! → こん畜生!

例文(39)~(43)は話者の願望、呪いや腹立ちが表現されている。やはりやや古風の表現と言えるが、現在でもしばしば使われている。

d) 主語が3人称単数の事柄や es の場合

- (44) So **werde** die Haarnadel zum Dolche! (Lessing: *Emilia Galotti*, S.85)

それなら髪留が短剣になりますように。

- (45) Das **sei** dein Stolz. (Schiller: *Wilhelm Tell*, S.38)

それをおまへの誇りとせよ。

- (46) Wohlan, so **sei** der Ring sogleich **gebildet**. (Schiller: *Wilhelm Tell*, S.46)

ではただちに輪を作ってもらいたい。

- (47) Es **sei**! Bis dahin, wohl! (Lessing: *Minna von Barnhelm*, S.93)

まあいい! それはその時のことだ。

- (48) Dem Einzelnen **bleibe** die Freiheit, sich mit dem zu beschäftigen, was ihn anzieht, was ihm Freude macht,...aber das eigentliche Studium der Menschheit ist der Mensch. (Goethe: *Die Wahlverwandtschaften*, S.184、関口 (2000:203))

各自が、惹きつけられ、喜びをなすものを研究する自由は、そのままにしておくがい

い、しかし人類の本来の研究対象は人間そのものである。

例文(44), (45)では事物や事柄に対する話者の願いや要求が表現されている。例文(44)では、死によって純潔を守ろうとするエミーリアは、父が持っている剣を自分に渡すように頼む。これは髪留ではないとためらう父に「髪留しか許されないなら、その髪留が剣になるように」願うこの文は、エミーリアの自決への強い思いが表されている。例文(46)は、しばしば用いられる *sei, seien* と過去分詞の結合である。*Sei gegrüßt!* (ようこそ!) といった、受け身の命令文に似ているが、¹⁷⁾ なにか主語をもってくる場合には接続法 I 式の用法になる。例文(47)は *Es sei! Es sei so!* などで用いられ「まあ～としておけ」「それでよかろう」といった事実の承認であるとともに、「そうであれ!」といった弱い要求でもある。例文(48)では、最初の接続法 I 式 (*bleibe*) の文は「自由であれ」という要求とともに、「自由であっていいが、しかし...」という認容でもあり、本来の主張は *aber* 以下の「人類本来の研究対象はやはり人間そのものである」という点にある。ただ、「仮定」や「認容」も要求的な表現の一(変)種といえるかもしれない。(Mgnosson (1976:40))

5) 話法の助動詞 *mögen* の接続法 I 式による 3 人称に対する要求・願望表現

話法の助動詞 *sollen, müssen* などの直説法を使って 3 人称に対する要求を表すことが出来る。¹⁸⁾ 一方 *mögen* は接続法 I 式 (*möge*) ないし II 式 (*möchte*) により 3 人称に対する要求を表すことができる。今まであげた例文も多くは *möge* で書き換えることができる。例えば例文(7) の中高ドイツ語 *sende* は *möge...senden*. で現代語訳されていた。このような書き換えは古高ドイツ語や特に中高ドイツ語に頻繁にみられるが、¹⁹⁾ 接続法では最初は *müssen*、後に *mögen* の接続法 I 式によって表される Wunderlich (1901:276), Paul (1958:157), Dal (1966:163)。ここでは数例をあげるだけにする。

(49) *fon gót er (Ludwig) múazi haben munt* (Otfrid. *Ludw.* 32, S.2, Paul (1958:157))

神によって王が守られますように。

(50) *got muezze iuch bewarn.* (Hartmann von Aue: *Iwein* 5530, S.322, Erdmann (1886:122))

神があなたをお守りしますように。

(51) **Möge** doch Hermann sie treffen! (Goethe: *Hermann und Dorothea*, S. 8)

ヘルマンがその人たちと出会えますように!

(52) *Fluch treffe sie! Und möge* Gott sie ..verderben. (Schiller: *Die Jungfrau*, S.12)

災いがあの人に起こり、神様があの人を滅ぼしてくださいますように!

例文(49)の古高ドイツ語、例文(50)の中高ドイツ語では *muozan, müezen (müssen)* の接続法 I 式単数 (*muazi, muezze*) が用いられているが、*müssen* の意味の変化とともに、例文(51)、(52)のように *mögen* の接続法 I 式によって書き換えられるようになった。²⁰⁾

このように接続法 I 式による 3 人称に対する要求・願望表現はやや古風なものである。現代ドイツ語と言っても、例文の出典からも伺えるようにレッシング、ゲーテ、シラー、クライスト、ヘッベルなど 18 世紀や 19 世紀の作品などにはよく使われているが、20 世紀の作品などでは *Gott helfe mir!* のような定式化されたもの以外はあまり使われない。しかし Windfuhr (1967) が接続法 I 式の命令法への接近について論じているように、1 人称複数形は、勧誘表現 (*Gehen wir!*) に、3 人称複数形は、2 人称敬称の命令形 (*Kommen Sie bitte!*) に、2 人称複数形は *e* が落ち、2 人称複数形の命令形 (*Kommt!*) にと、3 つの接続法の複数形は命令法に同化している。単数 1 人称の使用は稀であるし、2 人称単数は命令法があり、接続法は用いられない。つまり 3 人称単数の接続法のみ、命令文とは異なる機能をもった 3 人称に対する固有の要求表現として存在し続けていると言える。

註

- 1) Fries (1992:165,178f.) は、命令文が平叙文と異なる点として 1) 虚辞の *es* の否容認、2) トピック省略の不可能性、3) 文頭でのアクセントのない主語人称代名詞の不容認、4) 以下のように命令文と平叙文が並列した際の主語省略の不可能性などをあげている。
Du liest den neuen Chomsky und (du) bestehst die Prüfung. (平叙文の *du* 省略可能)
Du lies den neuen Chomsky und du bestehst die Prüfung. (平叙文の *du* 省略不可)
 高橋 (2017) の「はしがき iv」 と 5 ページなども参照。
- 2) 例文 (1) は Paul (1958) 以外に Flämig (1962:111)、Dal (1966:138)、Zifonun et al. (1997: 1726)、相良 (1990:282)、常木 (1996:23)、関口 (2000:193) など で引用されているが、Flämig, Zifonun, 相良、常木では *Gestehe ich's nur offen!* と *gestehe* の *e* と *offen* が付いている。Dal にはゴート語や古高ドイツ語の例もあげられている。
- 3) この例文に関しては鈴木 (2007:68) の注 16 参照。また、1 人称単数に対する要求になぜ接続法 I 式が適しているかに関しては橋本 (1978:224) 参照。
- 4) 接続法 I 式、II 式という命名の由来に関しては Magnusson (1976:24f.)、常木 (1996:122f.) 参照。
- 5) 接続法のもう一つの用法は間接話法で、これには I 式ないし II 式が用いられる。間接話法と要求話法の類似性に関しては Flämig (1962), Jäger (1971:236f.) 参照。例えば *Der Arzt besuche sie.* という接続法 I 式の文が (導入文のない) 間接話法か要求話法かはコンテキストしだいである。
- 6) それ以外に副文での「目的」の用法 (*Finalsätze*) もあるがここでは触れない。接続法の分類で Magnusson (1976:106) も別扱いにしている。
- 7) Jäger (1971:28f.) によれば、3 人称に対する要求を表す接続法 I 式は、接続法全体の使用の数パーセントにすぎない。この *Relikt* (遺物) という表現は Fourquet (1973:66f.) にもみられる、Magnusson (1976: 38, 118) も参照。また、常木 (1974:76,85) は、現代ドイツ語における接続法の後退という主張に疑念を呈しているが、3 人称に対する要求を表す接続法 I 式 (要求話法)

の後退ははっきりと認めている。

- 8) Schwartz (1973:35) は、要求話法は接続法 I 式の形式だけでなく、*jeder* のような不定代名詞、*möge* のような特定の話法の助動詞、そして倒置という様々な要素と接続法 I 式の複合作用にあるとしている。
- 9) 古高ドイツ語 *sîn, wesan* (sein) では、*wesan* には命令法 2 人称単数 *wis* と複数形 *weset* があつたが、*sîn* には命令法の形態はなく、接続法 2 人称単数 *sîs(t)* と複数形 *sît* が *wis, weset* とならんで命令に用いられていた。その後複数 *sît* は、中高ドイツ語以後において命令形として理解されるようになり、古い 2 人称の命令形の形態 *weset* を完全に排除した。その後、複数形 *sît* に対して、古い 2 人称単数の *wis, bis* の代わりに単数形の *sei* が作られた。(Paul (1958:156f.), Dal (1966:139.) 参照。)
- 10) この点に関しては鈴木 (2017b) 参照。
- 11) Behaghel (1924: 227) は、3 人称複数形が、まわりのシグナルにより要求文であることが明確化されている例として以下をあげている。
Musik **lärme** die Mitternacht aus ihrem bleiernem Schlummer auf, tausend brennende Lampen **spotten** die Morgensonne hinweg. (Schiller: *Fiesco*, S.14)
音楽を景気よくやって真夜中の重たい眠りをさませ。ランプというランプをつけて朝日をあざ笑ってやれ。(シラー『フィエスコの叛乱』野島正城訳 26 ページ)
- 12) *man* に関しては、ゲーテがワイマールの劇場で観客の笑い声を鎮めるために *Man lache nicht!* と言ったと伝えられている。Flämig (1962:112)、相良 (1958:160) 参照。
- 13) Glaser (2002:166f.) によれば、料理本での *man* + 接続法の使用は稀とのことである。
- 14) この点に関しては鈴木 (2016) 参照。
- 15) 湯浅 (2009:3ff.) にはこれに関する詳しい記述がある。また戸沢 (1968:10) は、現在では接続法 I 式で表される神への願望が、古いドイツ語では *Wollte Gott* ～という接続法 II 式で表される形式があつたことに触れている。
- 16) この点に関しては拙著『体験話法 ―ドイツ文解釈のために』大学書林 2005 年 119 ページ参照。
- 17) 受動文の命令形に関しては、鈴木 (2012:33)、Suzuki (2018) 参照。これらの記述に関しては関口 (2000: 190 ff.) も参照。
- 18) 話法の助動詞による要求表現に関しては、鈴木 (2008) 参照。なお、Flämig (1962: 126f.) が指摘しているように、要求を表すのに *wollen, mögen* は接続法を必要とするが、*sollen, müssen* はそのまま要求を表せる。これは *sollen, müssen* に命令形がないのに対して、*wollen* にそれが可能になる一つの理由かもしれない。Suzuki (2018) 参照。
- 19) 例えば『ニーベルンゲンの歌』における 550 例をこえる命令・要求表現のうち、30% は話法の助動詞、特に *ir sult* ～ (*Ihr sollt* ～) によるものである。鈴木 (2018) 参照。
- 20) *mögen* の接続法 II 式の *möchte* が同じように使われる例を関口が挙げている。

Möcht er's allen sein und möchte kein Leidender auf dieser Insel trauern!

(Schiller: *Maria Stuart*, S.43, 関口 (2000:192))

願わくはひとしく万民にとっても喜ばしい日であり、この島国に一人として悲しめる者のなからんことを祈ります。(『マリア・ストゥアルト』相良守峯訳 63 ページ)

使用テキスト

Althochdeutsche Literatur. Eine kommentierte Anthologie, Zweisprachig, übersetzt, herausgegeben und kommentiert von Stephan Müller. Stuttgart (Reclam) 2007.

Das Neue Testament in der deutschen Übersetzung von Martin Luther. Band 1 Text in der Fassung des Bibeldrucks von 1545. Stuttgart (Reclam) 1989. *Die Bibel*, Nach der Übersetzung Martin Luthers. Mit Apokryphen, Stuttgart (Deutsche Bibelgesellschaft), 1999.

Das Nibelungenlied. Mittelhochdeutsch/ Neuhochdeutsch. Nach der Handschrift B herausgegeben von Ursula Schulze. Ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Stuttgart (Reclam) 2015.

Goethe, Johann Wolfgang: *Faust Der Tragödie erster Teil*. Stuttgart (Reclam), 1976.

Goethe, Johann Wolfgang: *Egmont*. Stuttgart (Reclam), 1975.

Goethe, Johann Wolfgang: *Götz von Berlichingen*. Stuttgart (Reclam), 1976.

Goethe, Johann Wolfgang: *Hermann und Dorothea*. Stuttgart (Reclam), 1976.

Goethe, Johann Wolfgang: *Die Wahlverwandtschaften*. Stuttgart (Reclam), 1998.

Grimmelshausen: *Der abenteuerliche Simplicissimus*. Stuttgart (Reclam), 2012.

Grillparzer, Franz: *Medea*. In: *Das goldene Vließ*. Stuttgart (Reclam), 2015.

Hartmann von Aue: *Der arme Heinrich*. Stuttgart (Reclam), 2013.

Hartmann von Aue: *Iwein*. Stuttgart (Reclam), 2015.

ハルトマン・フォン・アウエ『ハルトマン作品集』(平尾浩三他訳) 1982年 郁文堂。

Hebbel, Friedrich: *Maria Magdalena*. Stuttgart (Reclam), 2012.

Kleist, Heinrich von: *Der zerbrochne Krug*. Stuttgart (Reclam), 1977.

Lessing, Gotthold Ephraim: *Nathan der Weise*. Stuttgart (Reclam), 2015.

Lessing, Gotthold Ephraim: *Minna von Barnhelm*. Stuttgart (Reclam), 1977.

Lessing, Gotthold Ephraim: *Emilia Galotti*. Stuttgart (Reclam), 2006.

Mann, Thomas: *Buddenbrooks Verfall einer Familie*. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag), 1996.

Otfrids Evangelienbuch, Herausgegeben von Oskar Erdmann, besorgt von Ludwig Wolff. Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 1973, *Christi Leben und Lehre besungen von Otfrid*, aus dem althochdeutschen übersetzt von Johann Kelle, Prag (Verlag von Friedrich Tempsky), 1870.

Schiller, Friedrich: *Gedichte, Eine Auswahl*. Stuttgart (Reclam), 1974.

Schiller, Friedrich: *Die Verschwörung des Fiesco zu Genua*. Stuttgart (Reclam), 2010.

シラー『フィエスコの叛乱』野島正城訳 岩波文庫 1999年。

Schiller, Friedrich: *Wilhelm Tell*. Stuttgart (Reclam), 2006.

Schiller, Friedrich: *Die Jungfrau von Orleans*. Stuttgart (Reclam), 2005.

Schiller, Friedrich: *Maria Stuart*. Stuttgart (Reclam), 2016.

シラー『マリア・ストゥアルト』相良守峯訳 岩波文庫 1983年。

*邦訳のあるものは上記以外でも参考にさせていただいた。

参考文献

- Bausch, Karl-Heinz (1979) : *Modalität und Konjunktivgebrauch in der gesprochenen deutschen Standardsprache*. München: Max Hueber Verlag.
- Behaghel, Otto (1924) : *Deutsche Syntax II*. Heidelberg: Winter.
- Bosmanszky, Kurt (1976) : *Der Imperativ und seine Stellung im Modalsystem der deutschen Gegenwartssprache. Untersuchungen über Ausdrucksmöglichkeiten der Aufforderung*. masch. Dissertation Wien.
- Braune, Wilhelm/ Ebbinghaus, A.E. (1981) : *Gotische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Braune, Wilhelm/ Eggers, Hans (1987) : *Althochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Brinkmann, Hennig (1971²) : *Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung*. Düsseldorf: Schwann.
- Buscha, Joachim/ Zoch, Irene (1995) : *Der Konjunktiv*. 4.Aufl. Leipzig: VEB Verlag.
- Dal, Ingerid (1966³) : *Kurze deutsche Syntax Auf historischer Grundlage*. Tübingen: Niemeyer.
- Donhauser, Karin (1986) : *Der Imperativ im Deutschen Studien zur Syntax und Semantik des deutschen Modusystems*, Hamburg: Helmut Buske Verlag.
- Duden (1984) : *Die Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*, 4., völlig neu bearbeitete und erweiterte Aufl., Mannheim / Wien / Zürich: Dudenverlag.
- Erben, Johannes (1966) : Zur Frage des Konjunktivs. In: *Zeitschrift für deutsche Sprache* 22, 129-39.
- Erben, Johannes (1980) : *Deutsche Grammatik. Ein Abriss*, 12. Aufl. München: Max Hueber.
- Erdmann, Oskar (1886) : *Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung* Erste Abteilung. Stuttgart: Verlag der J.G. Gotta'schen Buchhandlung.
- Flämig, Walter (1962) : *Zum Konjunktiv in der deutschen Sprache der Gegenwart, Inhalte und Gebrauchsweisen*. Berlin: Akademie verlag.
- Fourquet, Jean (1973) : Zum Gebrauch des deutschen Konjunktivs. In: *Linguistische Studien 4, Festgabe für Paul Grebe zum 65. Geburtstag*. Düsseldorf: Schwann, S.61-72.
- Fries, Norbert (1992) : Zur Syntax des Imperativs im Deutschen. In: *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 11 (2) , 153-188.
- Glaser, Elvira (2002) : Fein gehackte Pinienkerne zugeben! Zum Infinitiv in Kochrezepten. In: Restle, D./ Zaefferer, D. (Hrsg.) : *Sounds and Systems. Studies in Structure and Change. A. Festschrift for Theo Vennemann*. Berlin/ New York: de Gruyter, 165-183.
- Jäckh, Karoline (2011) : *Konjunktiv I Synchron und diachron*, Studien zur deutschen Grammatik 79. Tübingen: Stauffenburg.
- Jäger, Siegfried (1970) : Indirekte Rede und Heischesatz. Gleiche formale Strukturen in ungleichen semantischen Bereichen, In: *Studien zur Syntax des heutigen Deutsch 6. Paul Grebe zum 60. Geburtstag*. Düsseldorf: Schwann, 103-117.
- Jäger, Siegfried (1973³) : *Empfehlungen zum Gebrauch des Konjunktivs in der geschriebenen deutschen Hochsprache*. Düsseldorf: Schwann.
- Jäger, Siegfried (1971) : *Der Konjunktiv in der deutschen Sprache der Gegenwart*. München: Max Hueber Verlag.
- Jørgensen, Peter (1966) : *German grammar, Band 3.*, Englische Übersetzung London: Heinemann.

- Jung, Walter (1982) : *Grammatik der deutschen Sprache*. 7. Aufl. Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Hindelang, Götz (1978) : *Auffordern. Die Untertypen des Aufforderns und ihre sprachlichen Realisierungsformen*. Göttingen: Alfred Kümmerle.
- Krasheninnikowa, J. A. (1954) : Der Modus der Aufforderung im Deutschen. In: *Sowjetwissenschaft. Gesellschaftswissenschaftliche Abteilung*, 252-266.
- Magnusson, Kerstin (1976) : *Die Gliederung des Konjunktivs in Grammatiken der deutschen Sprache*. Uppsala.
- Petrova, Svetlana (2008) : *Die Interaktion von Tempus und Modus. Studien zur Entwicklungsgeschichte des deutschen Konjunktivs*. Heidelberg : Winter.
- Paul, Hermann (1958) : *Deutsche Grammatik IV*. Halle (Saale) Niemeyer.
- Schwartz, Ulrike (1973) : *Modus und Satzstruktur. Eine syntaktische Studie zum Modusystem im Deutschen*. Kronberg.
- Suzuki, Yasushi (2018) : Über die Imperativierbarkeit der deutschen Verben. In: *Energieia* 43. Arbeitskreis für deutsche Grammatik, 1-17.
- Welke, Klaus (1971) : Dienen Modalverben der Umschreibung des Konjunktivs? In: *Probleme der Sprachwissenschaft*, The Hague / Paris : Mouton, 298~304.
- Windfuhr, Gernot (1967) : Strukturelle Verschiebung: Konjunktiv Präsens und Imperativ im heutigen Deutsch. In: *Linguistics* 3, 84-99.
- Winkler, Eberhard (1989) : *Der Satzmodus >Imperativsatz< im Deutschen und Finnischen*. Tübingen: Niemeyer.
- Wunderlich, Hermann (1901) : *Der Deutsche Satzbau. Erster Band*. Stuttgart: J. R. Gotta'sche Buchhandlung.
- Zifonun, Gisela / Hoffmann, Ludger / Strecker, Bruno et al. (1997) : *Grammatik der deutschen Sprache*. Band 1~3. Berlin / New York: de Gruyter.
- 千種眞一 (1989) : 『ゴート語の聖書』 大学書林。
- 千種眞一 (1997) : 『ゴート語辞典』 大学書林。
- 橋本文夫 (1978) : 『詳解ドイツ大文法』 三修社。
- 菊池悦郎 (1976) : 「現代ドイツ語における接続法の事実性 (可能性) の程度をめぐって」
『金沢大学教養部論集 人文科学篇』 第13号 105~111ページ。
- 古賀允洋 (1979) : 『演習 中高ドイツ語文法』 大学書林。
- 工藤康弘 (1985, 1986) : 「ルター聖書における接続法の統語論的考察 (I)、(II)」『山口大学「文学會志」』 第36号, 37号 85~106、37~50ページ。
- 大野勇二 (1979) : 『ドイツ語接続法』 三修社。
- 相良守峯 (1958) : 『ドイツ文章論』 岩波書店。
- 相良守峯 (1990) : 『ドイツ語学概論』 博友社。
- 関口存男 (2000) : 『ドイツ文法 接続法の詳細』 関口存男著作集 ドイツ語学篇1 三修社。
- 新保雅浩 (1993) : 『古高ドイツ語 オトフリートの福音書』 大学書林。
- 鈴木康志 (2005) : 『体験話法 ―ドイツ文解釈のために』 大学書林
- 鈴木康志 (2007) : 「ドイツ語命令・要求表現のさまざまな形態について ―『ブデンブローク家の人々』を例として―」『言語と文化』(愛知大学語学教育研究室) 第17号 49~71ページ。

- 鈴木康志 (2008) : 「ドイツ語話法の助動詞による命令・要求表現」『言語と文化』(愛知大学語学教育研究室) 第19号 1~20 ページ。
- 鈴木康志 (2012) : 「Imperativ (命令形) をつくらない動詞について」『言語と文化』(愛知大学語学教育研究室) 第27号 25~38 ページ。
- 鈴木康志 (2016) : 「命令文の主語について — 不定代名詞を主語とする命令文を中心に」『ドイツ文学研究』(日本独文学会東海支部) 第48号 75~92 ページ。
- 鈴木康志 (2017a) : 「ドイツ語における勧誘表現について」『言語と文化』(愛知大学語学教育研究室) 第37号 61~76 ページ。
- 鈴木康志 (2017b) : 敬称の命令・要求表現の歴史的変遷について — 中高ドイツ語から新高ドイツ語まで」『ドイツ文学研究』(日本独文学会東海支部) 第49号 73~86 ページ。
- 鈴木康志 (2018) : 「中高ドイツ語における命令・要求表現について — 『ニーベルンゲンの歌』を中心に —」『一般教育論集』(愛知大学一般教育研究室) 第55号 (9月発行)。
- 高橋輝和 (1994) : 『古期ドイツ語文法』 大学書林。
- 高橋英光 (2017) : 『英語の命令文 神話と現実』 くろしお出版。
- 戸沢 明 (1968) : 「Wollte Gott — 願望文と神の意志」 東京都立大学 『人文学報』 65号 1~22 ページ。
- 常木 実 (1996) : 『接続法 — その理論と応用 (増訂版)』 第13版 郁文堂。
- 常木 実 (1974) : 「接続法は現代ドイツ語において果たして後退しつつあるか？」 東京大学教養学部『外国語科研究紀要』 第22巻 第1号 67~92 ページ。
- 湯浅英男 (2008) : 「間接話法、あるいは接続法第1式の機能について」『ドイツ文学論集』 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 第37号 35~55 ページ。
- 湯浅英男 (2009) : 「接続法第一式の「要請」と「認容」の用法について — 非存在な命題内容とモダリティとの関わり —」『ドイツ文学論集』 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 第38号 1~34 ページ。